

シンポジウム

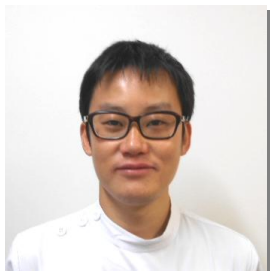
作業を基盤とした実践の魅力

コーディネーター 近藤 敏
広島都市学園大学 教授

コメンテーター 齋藤 さわ子
茨城県立医療大学 教授

シンポジスト

紙本 和紀
興生総合病院



作業を基盤とした実践のエビデンス

「作業とは、日々生活で行われている一群の活動や課題で、個人と文化によりその価値と意味が形成され付与されたものである」と定義され、世界作業療法士連盟は、「作業療法は作業を通して健康と安寧を促進することに関心を持つクライアント中心の健康専門職である」と定義を改定した。日本でも「生活行為向上マネジメント」が取り組まれ、国内外の作業療法において、クライアントにとって意味のある作業を基盤とした実践が強調されている。作業を基盤とした実践のエビデンスについて、海外では、エビデンスレベルの高い研究手法にて、その効果が確認されている。しかし、日本において研究された論文は少なく、特に医療分野におけるエビデンスは質・量ともに不足しているのが現状である。そこで、世界と日本の作業を基盤とした実践のエビデンスについて紹介し、作業を基盤とした実践を臨床で自信を持って行える手がかりを作りたい。

シンポジスト

久保 凌子
大野浦病院



一番ハードで、でも一番実践的だった

脳梗塞により左片麻痺、高次脳機能障害（注意障害・記憶障害）を呈した事例を担当した。COPM や AMPS を使用し、ニーズとして挙げた家事や趣味（園芸・散歩等）等の作業を段階付けて行っていくことで、できる作業が増え、COPM や AMPS においても向上が見られた。COPM を実施することでクライアント自身が現状をどう捉えているのか、今後をどのように考えているのかを知ることができた。また、AMPS 結果からクライアント自身がどの程度作業ができるようになっているかを把握することができ、加えて課題を明確にすることができた。その結果、高次脳機能障害を伴っていても安全に生活するための方法を患者様と一緒に考えることができ、退院後ケアハウスにて本人のペースで楽しんで生活することが可能となった。クライアントの作業に目を向けることが、クライアント自身も作業に目を向けるきっかけとなり、作業を基盤としたアプローチにつながると考える。

シンポジスト

澤田 恭一

就労移行支援事業所 FLaT



**就労支援における作業を基盤とした実践の
取り組み～働きたい気持ちに応えたくて～**

作業療法士の資格を取得してから、主に精神科病院のデイケアで様々なプログラムを毎日行っていた。プログラムをこなす日々の中で、「作業で人は元気になるということを僕は何か捉え違いしているのではないか」、「今、一緒に取り組んでいる作業は本人の思いを実現するための手段として成立しているのだろうか」、「こちらの都合で用意した作業ではなくて生活のすぐそばにある自然な作業、そして、その人の思いあつての作業でなければ」、「もっと個人的な思い、その人が実現したいという思い、誰にでもある働きたい思いへの支援がしたい」と考えるようになり、精神障がいを持つ方への就労支援に携わらせて頂くようになった。現在は、自分たちで立ち上げた就労移行支援事業所で就労支援を行っており、今回は、ご本人の「働きたい気持ち」、「働きたい気持ち」を実現するために一緒に行っている作業を基盤とした日々の実践の中で、心に残るエピソードを中心にお話しさせて頂きたいと思う。

シンポジスト

高原 奨

あまのクリニック



通所施設での作業を基盤とした実践

OT となった 2 年目、同僚の PT に「機能向上のための訓練は PT がするから、同じ機能訓練をせず作業に関わって」といわれた。そのとき、作業療法の専門性は「作業」とであると改めて認識した。作業とは何かを考え、講習会の受講や勉強会への参加、実践報告、文献を読むことを始め、作業を基盤とした介入の実践に魅力を感じ、少しずつ自分の実践に取り入れていった。作業を基盤とした介入の魅力は、クライアントの意味のある作業が行えない理由や行うための方法を、適切に評価でき、介入できるところである。

当院では、在宅サービスである通所リハビリ、医療型のデイ・ケア内において、作業を行うための環境が十分整っていなかった。しかし、利用者のニーズを聴取し実践していくうちに、徐々に作業が行える環境へ変化していった。この度、そういった経緯をはじめ、調理や園芸、木工、手芸、絵画、散歩、外出など、作業を基盤とした介入の実践を紹介する。

